

社会学における理論構成の方法

指 田 隆 一

(平成19年9月29日受理 最終原稿平成19年12月6日受理)

1 問題

狭義の社会調査論では社会理論あるいは社会学理論を無視して講義することが出来る。しかし、それでいいのだろうか。社会調査を社会学の研究方法と考えるなら、理論との関係を無視して、教授することは不適切であろう。理論についての説明を取り込むには、いわゆる「学説研究」ではなく「理論構築」について説明することが適切であろう。しかし、理論や理論構築についての共通理解があるのだろうか。本論では、1960 - 70年代の理論構築運動とKuhnを中心とする科学哲学に触れながら、社会調査と理論構築について考察する。このとき、経験世界との接触を保つため、家族社会学を実質的な分野とする。なお、本文中で言及する書名については、原著のテーマを再現するために、原題に忠実な訳に付替えたものがある。

2 現状

(1) 社会調査の手順

調査・研究の手順あるいは過程についてのモデルには大別して2つある。まず、図1のような問題意識から報告書作成までの手順を直線的に説明するもので、これを直線モデルと呼ぼう。

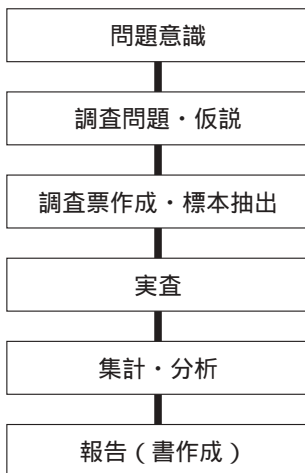


図1 社会調査の過程（直線モデル）

次に図2のような円環あるいは循環形のモデルがある。これを円環モデルと呼ぼう。図2はWallaceの図式であり、矩形は情報項目を、楕円は情報の変換を表している。図2の「概念形成、命題形成、命題整理」は帰納的な過程である。図1と図2で要素が異なるように見えるが、調査の作業としてほぼ同じである。ただし、円環モデルでは、同じことを繰り返すのではなく、前回の調査・研究で解決されなかった問題、あるいは、新たに気が付かれた問題に関して研究が継続されることを意味する。ここが2つの図式の相違点である。

社会調査を狭い意味でとらえると、中央の水平線から下の部分である。つまり、仮説（あるいは調査

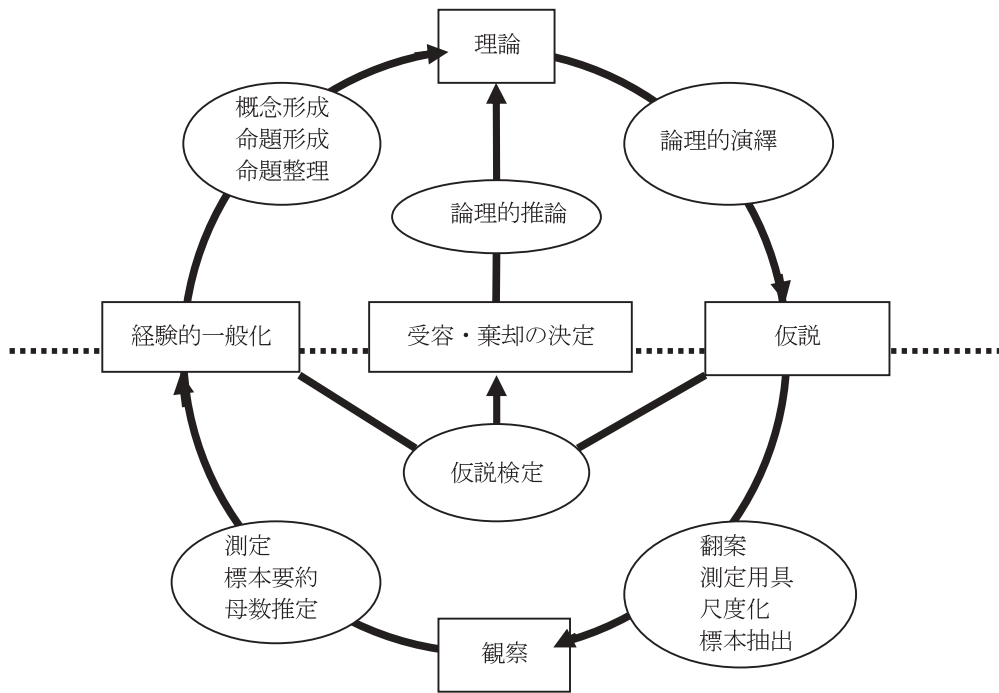


図2 社会調査の過程（円環モデル。なお、中央の水平な点線は論者が挿入した）

出典：図2 科学の過程の主要な情報要素，方法的制御と情報変換（Wallace, 1971:18）

問題）に基づいて調査票を作成し、標本抽出し、実査、収集された回答を集計・分析し、報告するという作業過程を意味する。社会調査を学部での科目として教授する場合この作業過程が最小限であろう。上半分は、社会調査の講義に含めてもいいだろうが、これのみで「社会調査」の講義ということは出来ないであろう。上半分のみをカバーする科目はなんと呼べばよいのだろうか。通常、社会学では「理論」が「学説研究」を意味することが多いので、「社会学理論」と呼ぶと、社会学の既存の学説紹介・学説批判と理解されるのではないだろうか。理論を作るということを強調するためには「理論構築」、「理論構成」など「作る」という意味の言葉が入っている名称の方が適していると考えられる。

(2) 理論と理論でないもの

「社会学理論」と呼ぶあるいは呼ばれることがあるが、本当は社会学理論でないものがある。これについてはMertonの整理が有用である。Mertonは、「社会学理論」と一括されるものの中に、(1) 方法論：科学的手続きの論理、(2) 一般的な社会学の方針：何らかの形で考慮すべきいろいろなタイプの変数を示すに止まり、特定変数間の一義的關係を規定していないもの、(3) 社会学的概念の分析、(4) 社会学上の事後解釈。(5) 社会学における経験的一般化：2つ以上の変数間の關係について観察された斉一性を要約している個々の命題で、いわゆる科学的法則

の1タイプ。(6)社会学理論：一つの理論から科学的法則が引きだせる恒常性についての立言の6つのものがあると指摘した(Merton、1957=1961:79-91)。より一般的な用語で表現し直すと、(5)の経験的一般化は「観察事実」あるいは「経験法則」であり、(6)の社会学理論は「理論」である。なお、Mertonのこの本には、社会学理論の機能についての説明があるが、「理論」そのものについてのそれ以上の説明はない。

ところで、他の科学と比較して方法論を論じるとき、次のMertonの注意喚起は今日でも有効であろう。

「社会学者が十全な科学的方法を例示し、または説明しようとして用いる事例は、普通当の社会学以外の学問から引用されている。16世紀のではなく20世紀の物理学や化学が、20世紀社会学の方法論的原型または手本とされ、社会学とこれらの科学の間には、幾世紀にもわたる累積的な科学的研究のひらきがあるということがほとんど自覚されていない。だから、このような比較はどうしてもお題目だけのものとなってしまっていて、実際に即しないのである。方法論に関する要求がもっと穏当であったならば、方法論上の願望と社会学の実績の間のギャップもこれ程目に立つこともなく、またこれ程不愉快の種にもならなかったであろう(Merton、1957=1961:80)。」

次に、帰納と演繹についてより詳しく見てみよう。

(2) 帰納

経験的一般化から理論にいたる過程では、個々の調査結果からの帰納的推論が行われ、理論が形成される。しかし、それが、すべて、経験的法則を超えた、抽象化、理想化、(単純化)した理論(的)法則であることを意味しない。帰納的推論は、斉一性の原理、つまり、「これまで観察したものと、まだ観察されていないものは似ている」という原理が成り立たなく、観察に頼る場合は、正当化できないものであるという批判がある。

Chalmers(1982=1985:23)は、一般化が正当であるみななされるために満たさなければならない条件として、次の3つを挙げている。

- (1) 観察言明(調査・経験的研究結果)の数が多。
- (2) 多様な条件下での繰り返されている。
- (3) 受容された調査結果のどれ一つも、そこから導き出された普遍的法則と矛盾しない。

これらは帰納の1組の基準として、実際的には妥当であると思われる。

なお、経験的一般化と帰納的推論の過程については次のような混乱も見られる。たとえば、中道(1997:45)は「経験的一般化」とは「『2つ、またはそれ以上の変数間の関係について観察された斉一性を要約している個々の命題』であり、具体的なデータで確かめられた諸知見を通して共通に成立する変異のパターンを発見して一般化したものである(Merton、1968ママ:88)」と説明している。Mertonの文章は前半の『』内であり、後半は、中道の文章である。前半の「観察された斉一性」が特定の調査の標本から得られたので、それを母集団へと一般化することは経験的一般化である。2つ以上の調査にもとづいておこなわれ、個別の命題から

「すべての」という普遍命題へ一般化するなら、この一般化は帰納的推論と呼ぶのが適切である。後半の「具体的なデータで確かめられた諸知見」は、Mertonの言葉を借りると、「科学としての社会学の素材」である。これら素材から「共通に成立する変異のパターンを発見して一般化したもの」は社会学理論である。なお、Mertonの文献の出版年は1968でなく、1961である。

(3) 演繹

次に、仮説演繹法について検討しよう。Mertonが用いた例を利用すると、

- (1) 社会的凝集性(B)は、強い緊張や不安(C)にさらされている集団成員に心理的支えを与える。
- (2) 自殺率(D)は、人々の除去されない不安(C)や緊張の函数である。
- (3) カトリックの人はプロテスタントの人(A)よりも、社会凝集性(B)が大きい。
- (4) したがって、プロテスタントの人の場合より、カトリックの人(A)の方が自殺率(D)の低いことが予測される。(Merton, 1961:89、なお、(A)～(D)の記号を追加した)

より、見通しよくするために、表現を工夫して、次のように表す。(-)は、たとえば社会凝集性が高いと不安が低いという負の関係を表す、「カトリック」は本来、変数である宗教の値であるが、この文脈では宗教という変数を代表する。このように、社会学では文脈から「値」を用いて「変数」を表すことがよく行われるが、これは、値なのかそれとも変数なのかを聞き手(読み手)に負担をかけるという意味では改善が必要である。

- | | |
|---------------------------|-----------|
| (1) 仮説 1: 社会的凝集性(B) (-) | 不安(C) |
| (2) 仮説 2: 不安(C) | 自殺率(D) |
| (3) 初期条件: カトリック(A) | 社会的凝集性(B) |
| (4) 観察予測: カトリック(A) (-) | 自殺率(D) |

この推論は、仮説が2つある演繹的推論の形になっている。この場合、前提(つまり仮説1と仮説2、初期条件)が正しければ、結果(観察予測)は必ず正しいはずである。(4)の観察予測を「調査の仮説」として、調査によって確かめ(言い換えると、調査の結果とつきあわせ)てみようというのが、仮説演繹法である。

ところで、「自殺」は抽象度が比較的低い概念である。すると、この仮説(2)を含む命題群は理論というには一般性が低いという批判をかわせないだろう。

(4) 問題

社会調査における理論に関する手続きとしては、まず、上記の2タイプになれる必要がある。社会調査のテキストの一部には帰納法と仮説演繹法についての言及はあるが、説明が不十分なものではないだろうか。学生がその目的や手順を理解し、例題を読み、練習問題を解き、その手

法の使い方を身につけ、さらに、限界や批判などの留意点を理解して、適切に応用できるようにする必要があるのではないか。適切なワークブックが必要ではないだろうか。

3 理論構築運動

社会学において理論構築あるいは理論構成がブームになったことがある。日本では1980年代であるが、大きな動きにまではならなかった。これは、1950-1970年代のアメリカの動向の影響であったと思われる。「社会科学において理論を構築する方法についての最初のリソースは1960年代と1970年代に書かれたテキストから来る（例えば、Burr, 1973；Chafetz, 1984；Glaser & Strauss, 1967；Hage, 1972；Merton, 1957；Zetterberg, 1964）(Bengtson, Acock, Allen, Dilworth-Anderson, & Kein, 2005:16)」

(1) 社会学分野での理論構築についてのテキスト

理論構築のテキストについての特徴は太郎丸（2006）が指摘しているが、その他に、B6版200ページ前後のコンパクトな本が多いという傾向もある。ここでは、これらのテキストを中心に理論構築について検討したい。なお、重要と思われるテキストのすべてを渉猟した結果ではなく、一部の利用できたものであるため、網羅性ということでは不十分なものであることを自覚している。また、これらの限られたテキストについても、この時点での理解の範囲内での紹介となっている。

Homansの『ヒューマン・グループ』と『社会行動』は理論構築についての学生向けのテキストではなく、それぞれ大分の著作であるが、理論構築運動の萌芽として重要であると考えられるのでとりあげる。Homansは1950年の『ヒューマン・グループ』で、社会集団についての5つの研究から、活動、相互作用、感情という3要素に着目し、システム理論の形成をめざし、さらに社会変動と社会闘争過程を論じた。2変数からなる経験的な命題を提示した（Homans, 1950=1959）。その後、1961年の『社会行動』で、彼はこれらの経験命題は、一般命題に帰納され、また説明項としての一般命題によって演繹的に説明される被説明項であると論じている。言い換えると、『ヒューマン・グループ』で抽出された命題が被説明項である経験命題（すなわち、経験法則）であり、『社会行動』で組織化された命題が説明項であり、一般命題（理論）である。Homansの理論化は、単純な、そして、あまりにも一般的と思われる「一般命題」を導いたのであるが、社会現象を2変数からなる命題として、意識的に組織化したことに意義がある。

Zetterberg（1954, 1963, 1966）は『社会学的思考法 - 社会学の理論と証明』で、命題、公理化、妥当性と信頼性などの概念を解説した。特に、命題を経験的（e）証拠を必要とするか / (E) 証拠によって支持されているかと、情報価値が（i）低いもの / (I) 高いものという2つの次元を設定して、（ei）証拠を必要とし情報価値が低いものを「通常仮説」、（Ei）証拠が十分あるが情報価値が低いものを「通常定説 = 調査結果」、（eI）証拠を必要とし情報価値が高いものを「理論的仮説」、（EI）証拠が十分あり情報価値が高いものを「理論的定説 = 法則」と分

類することを提案し、さらに、孤立した仮説ではなく、理論に統合されている仮説を検証することを勧めた。これまでの用語で言い換えると、Eiは経験法則、EIIは理論となる。

Merton (1957) は中範囲の理論という戦略を提案した。

Blalockは1964年の『非実験的研究における因果推論 - 』で因果モデルを連立方程式を利用して数学的に表現し、1969年『理論構築 - 言語的から数学的構築』で連立微分方程式による理論構築法を示した。さらに、1971年に『社会科学における因果モデル』を編集し、理論構築への因果モデル接近法のソースブックを提供した。このころは因果関係の図式を左から右、上から下へ描くというスタイルがまだ確立していなかったようだ。

GlaserとStrauss (1967=1996) の『グラウンディッド・セオリーの発見：質的研究のための戦略』は概念を開発する際の自らの経験を報告し、その過程と結果をグラウンディッド・セオリーと名づけた。

Reynolds (1971) の『理論構築入門』は、理論構築の体系的な学部学生用の教科書であり、理論構築の方法をルールとしてまとめている。また、巻末に練習問題として4つの課題が用意されている。

Stinchcombeは『社会理論の構築』(1968) で理論構築における論理的戦略、理論構造、また、概念形成の戦略を検討している。グラフ理論、線形方程式を利用している。

Mullins (1971) の『理論の技術：構築と利用』も理論構築の学部学生用教科書である、一般的な理論構築に関する説明に加えて、PERT法をとりあげている。PERT法 (Program Evaluation and Review Technique) とは、プロジェクト計画・管理手法の1つで、仕事 (プロジェクト) 全体を構成する各作業の相互依存関係をネットワーク図にすることで、各作業の日程計画を作成するとともに仕事全体の所要時間を算出し、さらにクリティカルパスを明らかにして所要時間の短縮を図る手法のこと。クリティカルパスとは、プロジェクトを遂行するときに、それぞれの作業の順、かかる時間を調査し、この作業が少しでも遅れると、プロジェクト全体のスケジュールが送れてしまうようなパス (経路、繋がりのある作業) のことである。目標を時間通りに完了させるための有効な手法である。PERT法は加藤 (1968) が紹介している。Hage (1972) の『社会学における理論構築の手法と問題』は、量的な変数を強調した。翻訳が経営学者によって、また、出版が経営学書であったためか、1978年の翻訳ではあるが社会学ではあまり注目されていない。

Lave & March (1975=1991) はモデルによって人間行動を説明する方法を学ぶため、第1章から第3章はどの分野でも利用可能な基本的なモデルを説明し、第4章から第7章は4種類の特定のモデルを考察している。彼らを取り上げたモデルは、個人的選択モデル、交換モデル、心理学の確率的学習モデルを基本とした適応モデル、接触・伝達・受容あるいは社会構造における病気の拡散に関する拡散モデルである。家族社会学分野から見ると、第3章までは、「一度試してみよう」という気になるが、その後の4つの章を読み進めるにつれて「いったいどのように家族に適応したらいいのか」と困惑させられる。

(2) 家族社会学分野における命題の整理

Goode (1971) の『社会体系と家族パターン：命題目録』は家族社会学の研究から命題を取り出し、項目別に整理して、インベントリー（在庫目録）として出版した。Burr (1973) の『家族社会学における理論構築』は、演繹的理論で家族社会学の、例えば、結婚満足、配偶者選択などの特定分野の命題を定式化する試みであった。この試みは、Burr他 (1979) の『家族に関する現代理論』の2巻に引き継がれている。第2巻では、交換理論、象徴的相互作用論、一般システム論、葛藤理論、現象学の5つの理論的志向でまとめている。

4 パラダイム、研究プログラム、研究伝統…科学哲学

社会学や家族社会学が何を指して、どのような方法で行っているか反省するために、科学哲学の方法を利用することは、間違いではないであろう。

科学は発見の蓄積によって発展するという考えがある。しかし、これに対して、Kuhnは「パラダイム」という言葉を利用して、その後、Lakatosは「研究プログラム」、そしてLaudanは「研究伝統」というモデルを提出した。

(1) Kuhn以前の考え方

Kuhn以前の考え方は、実証主義、論理実証主義であり、Hempel = Oppenheimの「演繹的 - 法則的モデル」、仮説演繹法、Popperの反証主義である。コントの実証主義を的確に理解していなかったかもしれない。特に、すべての知識は経験にルーツをもち、そして、神のような超越的原理や仮説的実体を想定しないという側面を軽く見てきたのではないだろうか。

反証主義に対してMertonは「どんなデータをとれば当の解釈を反駁できるのかという、正にその点の指摘が何もない。その結果、記録上の証拠はただ理論の例示となるだけで、理論をテストしたことにはならなかった (Merton, 1957=1961:87)」と反論している。

(2) Kuhnのパラダイム…分析単位の変更

Kuhnの貢献は、科学の進歩あるいは科学の変化についての分析単位を個々の理論から複合体に替えたことである。Kuhnはこの複合体をパラダイムと呼んだ。Kuhnによれば、「パラダイム」とは「一般に認められた科学的業績で、一時期の間、専門家に対して問い方や答え方のモデルを与えるもの (Kuhn, 1962=1971:v)」である。この定義によれば、パラダイムは1冊の本である。実際、ニュートンの『プリンピキア』などが例として挙げられている (Kuhn, 1962=1971:12)。しかし、『補章 - 1969年』では、パラダイムという言葉は『科学革命』の中で2つの異なった意味で使われていると振り返っている。パラダイムの1つの意味は「ある集団の成員によって共通して持たれる信念、価値、テクニックなどの全体的構成 (Kuhn, 1962=1971:198)」であり、もう1つの意味は「その構成中の一種の要素、つまりモデルや例題として使われる具体的なパズル解きを示すものであって、それは通常科学の未解決のパズルを解く基礎として、自明なルールに取って代わりえるもの (Kuhn, 1962=1971:198)」であると

している。

パラダイム概念が生まれた状況をKuhnからの引用で表そう。

「1958年から59年にかけて...特に印象づけられたことは、科学における正当な問題とか方法とはどのような性質のものか、について、社会科学者の間では意見のちがいが多く、その範囲も広いことであった。(中略)しかし、天文学、物理学、化学、生物学をやっているものの中では、今日の心理学者や社会学者の間に特にひろがっている基本的なことについての論争が生じることはない。この差異のみなもとをたずねようとして、私が以後『パラダイム』(paradigm)と呼ぶものの科学研究における役割を認めるにいたった(Kuhn、1962=1971:iv-v)。」

パラダイムがあることによって、基本的なことについての論争が生じないのであるから、基本的なことについての論争が生じている1960年ごろの社会学には、パラダイムがなかったということになる。しかし、そのような論争は「パラダイム間の競争」という現象であるかもしれない(Kuhn、1962=1971:167)。

Kuhnのパラダイム論の特徴の1つに通訳不可能性(共約不可能性)がある。通訳不可能性とは「科学についての彼らの基準や定義は同一ではない(Kuhn、1962=1971:167)」ということである。これによって、異なるパラダイムによって立つ者の間では、合理的な議論さえ出来ないという事態になる。

(3) Lakatosの研究プログラム

Lakatosは、科学の成長についての評価の基本単位を研究プログラムであると主張した。Lakatosの研究プログラムは、パラダイム論を2つの要素からなるものに再構成したといえる。

Lakatosを引用すると、「重要な科学的業績を記述するための形態的単位は、個々の仮説ではなく、研究プログラム(Lakatos、1978=1986:7)」であり、「成熟した科学の単位が研究プログラム(Lakatos、1978=1986:263)」である。研究プログラムは、Lakatosによれば、「堅い核」とこの核の周囲を巡る「防御帯」からなる。「堅い核に対して否定的推論を立ててはならない。(Lakatos、1978=1986:71)」「成功を収めた研究プログラムの古典的实例は、ニュートンの重力理論である(Lakatos、1978=1986:72)。」この研究プログラムは、初めて提出されたとき、多くの「変則事例」あるいは反証事例」に取り囲まれたが、次々と変則事例を「検証事例」に変えていった。ニュートンの重力理論という研究プログラムでは、ニュートンの力学3法則と重力法則(万有引力の法則)を否定式の対象から外している。これらの4法則が「堅い核」であり、反駁不能である(Lakatos、1978=1986:72)。「しかし、堅い核とは何であるかは明示されていない。

また、方法論について次のように述べている。方法論は科学者に「問題解決のための機械的規則を与えるもの(Lakatos、1978=1986:153)」であるというのは17、18世紀の理解であり、今日では「すでに定式化された理論の評価のための一群の規則(Lakatos、1978=1986:153)」からなりたつものである。

(4) Laudanの研究伝統

Laudanの「研究伝統」はKuhnのパラダイムとLakatosの研究プログラムを批判しながら「研究伝統」モデルを展開した。

Laudanは、科学は進歩する、進歩は「ある理論を改良したり、別の理論でその理論を置き換えるときはいつでも、その変更の後の理論が以前のものよりもより効率のよい問題解決者となるならば、その場合のみその変更は進歩的となる(Laudan、1977=1986:93)」と考えた。

問題には経験的問題と概念的問題の2種類がある。経験的問題とは「対象世界についての問題(Laudan、1977=1986:19)」である。経験的問題は(1)いかなる理論によっても未だ充分に解かれていない未解決問題、と(2)ある理論によってすでに充分に解かれてしまった解決済みの問題、(3)ある特定の理論は未だ解決を与えていなが、他の競合理論はすでに解いてしまっているような変則的問題の3つの型に分けられる。科学的進歩の1つの特質は未解決問題と変則的問題を解決済みの問題に変移させてゆくことである(Laudan、1977=1986:22)。

概念的問題とは(1)内在的的概念的問題、これは(1a)理論が何らかの内部矛盾を露呈したり、(1b)その分析の基本範疇が合間で不確かな場合に生起する、また、(2)外在的的概念的問題、これは理論が他の理論あるいは教義と抗争状態にあり、理論の擁護者が他の理論の方を合理的に基礎が安定していると信じている場合に生起するものである(Laudan、1977=1986:68)。理論の評価尺度として、「理論の全体的な問題解決効率＝理論が解決する経験的問題の数と重要度を評価しそこから理論が生み出す変則及び概念的問題の数と重要度を差し引くことによって決定される(Laudan、1977=1986:92)」というアイデアを示している。

そして、科学理論と呼ばれているものには2つの異なった種類の命題体系があり、これらを区別することが必要であると主張して、(1)「特定の実験的予測をしたり、自然現象の詳細な説明をしたりするために利用することができる、関連教義(普通は、「仮説」「公理」「原理」などと呼ばれる)の特定の一群(Laudan、1977=1986:96)」と(2)「非常に一般的であり、なかなか容易には試験しがたい一連の教義あるいは前提(Laudan、1977=1986:97)」としている。この(2)のより一般的な理論が、科学の進歩を理解し、評価するための主たる道具であり、このより包括的な理論群を「研究伝統」と呼んだ(Laudan、1977=1986:98)。研究伝統の実際的な定義として「研究領域内の存在や過程についての、そして、その領域内の問題を究明し理論を構築するために相応しい方法についての一群の一般的前提(Laudan、1977=1986:109)」であると言い換えている。これらの概念規定の中に含まれている「一般」性が特定の過程の詳細な説明に向かうことを妨げるので、「研究伝統は説明的でも予測的でも、或いは試験可能でもないのである(Laudan、1977=1986:110)」という特性に関係する。

研究伝統の機能は、「研究伝統は固有の理論の発展を可能にする一群の指針を提供してくれる(Laudan、1977=1986:107)」、「問題解決能力を改善するためにどのように理論を修正したり変更したりできるのかに関する重要な指針を含んでいる(Laudan、1977=1986:122)」、「いくなれば『こうなさい』『こうしてはならない』といった一そろいの存在論的、方法論的命令なのである(Laudan、1977=1986:108)」。研究伝統の例として行動主義をとりあげて、行動主義

の心理学者が用いる手続き方法は操作主義と言われるものであり、無意識の衝動を導入してはいけないことを指摘している (Laudan、1977=1986:108)。

しかし、KuhnやLakatosとは異なる点は、研究伝統の「(排除できない)クラスに分けられる要素群は時の経過とともに変化する (Laudan、1977=1986:132)」と考えていることである。そして、競合する一群の理論や研究伝統を選択する基準は「最も問題解決の妥当性をもつ理論 (または研究伝統) (Laudan、1977=1986:144)」である。

「科学革命が起こるのは、ある一定の分野の科学者にそれまで知られていなかったかあるいは無視されていた研究伝統が、その分野の科学者がその伝統を自分たちや同僚の擁護を求めて競い合うものとして真剣に考慮に入れねばならないと感じるほどの発展段階に達したときである (Laudan、1977=1986:183)。」

(5) 家族社会学では

KuhnやLakatos、Laudanは、科学哲学の分析単位を個々の理論から理論の複合体に替えたといえよう。Kuhnはパラダイム、Lakatosは研究プログラムの堅い核、Laudanは研究伝統という理論の複合体に替えたのである。そして、彼らは科学の発達、より控えめには「変化」をこれらの理論複合体の変化でとらえようとした。それでは、家族社会学ではどのように使われているのだろうか。

家族社会学の分野では、Lakatosの意味での「研究プログラム」やLaudanの「研究伝統」は使われていないようである。もっぱら、「パラダイム」が好まれているようである。家族社会学でのパラダイムの意味を「物事を科学的にみる認識枠組みのことを『パラダイム』(paradigm)という (山根、2005:12)」と。そして、「パラダイム転換」は「『集団として家族をみる見かた』から『個人単位で家族的現象をとらえる見かた』への転換 (山根、2005:12)」である。しかし、パラダイムの共認不可能性についてはまったくというほど視野に入っていない。

山根の整理によると、制度論的研究は家族の形態や家族にかかわる規範・規則・慣行の体系、それらの社会的発達などに注目する。集団論的家族研究は家族を空間的境界と独自の時間的過程を持つ集団とみなし、家族成員間の相互作用、家族が人格に与える影響など、家族集団内の人間関係に焦点を当てる点に特徴がある。個人単位で家族的現象をみる見方：ライフコース論、ネットワーク論など、個人を分析単位にする視角と方法が導入されてきた (山根、2005:12-13)。これらの研究方法がパラダイムであるかに関する検討は、今後の課題にしたい。

(6) 理論心理学では

「科学というものが、経験的データから帰納される経験的法則と、原理を中核とする説明体系としての理論から導かれる理論的法則との、一致・不一致を吟味することによって、相対的に信頼性・妥当性を高めようとしている情報体系だ (森正、2004:i)」この本は、8人の心理学者 (森正義彦、市川伸一、江川玟成、大山正、芋坂直行、繁榭算男、梶田正巳、西川泰夫) が理論の本質、理論の有用性なし必要性、理論構築の方略の3つの論点を中心に科学としての

心理学の理論上の問題について個人的な考えを明らかにしたもの。寄稿者による討論が最終章に「座談会抄録」として収録されている。意見は相違するが、共通点も見られる。彼らの考えが実験心理学を代表しているという保証はないが、大いに参考になる。

彼らの考えによれば、「科学とは『ものごとのあり方・起こり方についての法則を、独自の合理的な方法によって明らかにしようとする営みと、その成果としての知識の体系』である（森正2004:1）」また、理論的手続きを、理論構築（あるいは理論生成）と、理論の適合性を確かめること（つまり、理論の検証）の2つの手続きに分ける。

自然現象は少ない変数で理論を構成することに成功している。人間行動は多変数に規定されているので、心理学は難しいという意見もあるが、市川は心理学理論の宿命の特長として「心理学では、仮説命題を構成する『構成概念』に物理的実体がなく、客観的な手続きで測定されないことがほとんどである（市川、2004:23）」ことを指摘している。しかし、物理学でも、実体を観察するのが困難なものがあったし、また今でもある。それでも、物理学が経験から遊離してしまわないのは戸田山（2005:63-66）によれば、理論語を含む法則や仮説を観察文に結びつける対応規則があるからである。森正は、「分子の行動」という言い方では、物理的実体としてあるのは分子であり、分子の行動ではないように、物理的実体としての神経組織と「心理過程」とい現象のとらえ方があるという考え方を提示している。この考え方は社会学にも応用が可能ではないだろうか。

物理学ではある物理現象や属性が抽出されて、それが測定装置を介して数量化され、それらの関係を数学的に表現することで命題が得られ、それが経験法則となり、それは物理学の理論のベースである。それと同様に、社会現象や属性が抽出され、それが測定装置を介して数量化され、それらの関係を...と、考えるのは、1930 - 40年代のMacIverとLundbergの間の論争を思い出させる。「両者の議論は断片的に終わり、また相互に十分かみ合うものではなかった（磯部、1968:83）」というのは、この2者の主張が了解（理解）的方法と実証的（あるいは自然科学的）方法であって、これらが社会学においてはパラダイムであったので、通訳不可能であったためだろうか。

5 今日、そして将来

社会学には認知論レベルの多様性がある。たとえば、今田高俊は社会的現実へのアプローチのタイプは観察帰納法・仮説演繹法・意味解釈法の3つがあり、それぞれある側面では有用であり、どの方法が優れているかの優劣関係を論じるべきではないと主張している（今田、1991:19）。彼は「要するに、意味解釈法とは『特殊』で『個別』なりリアリティの意味認識を、解釈法によって了解可能な存在（経験）に接続する方法である（今田、1991、9）」と述べている。「意味認識」や「解釈法」、「了解可能な存在」、「接続する」などについて、詳細な、実際にどのように行うかの説明はない。超心理学（parapsychology）ならぬ超社会学（parasociology）に、全体性や社会「そのもの」、個人の主体性の強調など超心理学が強調するものと類似しているという疑いを解消できない。また、観察帰納法と仮説演繹法は実証的であり、意味解釈法

あるいは了解を重視するタイプとは、たとえば、「客観的」という言葉をめぐって、通訳可能な事もある。「3つの方法のあいだを、自由に移行して(今田、1991:20)」というのは、可能なのだろうか。理解を重視する質的研究法に関する文献が多くなっている今日、これらの問題を解決する必要がある。

大学制度の発達とともに社会学の誕生を描いたCollins(1994)は、社会学の理論の伝統を(1)紛争理論、(2)功利主義・合理的選択理論、(3)デュルケム理論(社会人類学の系譜で機能主義と儀礼から成る)、(4)ミクロ相互作用論にまとめている。Collinsのように、社会学の主要な理論枠組を、機能主義(あるいは構造機能主義)・交換理論(合理的選択)・葛藤理論・象徴的相互作用論の4つに分けるのはよくあることである。

社会学には多くの下位分野があるいわゆる連字付社会学であり、たとえば、家族社会学、都市社会学、犯罪社会学などである。今、例に挙げた下位分野は特定の実質的な(substantive)分野である。これらの下位分野の多くで利用される理論を一般理論と呼び、ある下位分野のみで使われる理論を実質理論と呼ぶとしよう。たとえば、上記の機能主義(あるいは構造機能主義)・交換理論(合理的選択)・葛藤理論・象徴的相互作用論などは、一般理論であり、家族周期論は実質理論である。

TaylorとBagd(2005)は1990-1999年のJournal of Marriage and the Familyで公表された経験的な論文をレビューした。JMFの10年の期間に公表された886の論文の中で、673が分析で何らかのタイプのデータを操作したという意味で経験的であると判定された。利用された理論的枠組みを分類する。その結果を表1に提示する。

表1のパーセントの基数は経験的研究の673である。ところどころで、度数とパーセントの値が対応してない。度数あるいはパーセントのミスプリントと思われる。また、度数の総数は707であり、これは研究総数の673を越える。これは、研究によっては複数の理論を使っていることがあるためだろう。

この結果を見ると、理論の種類が29と数多い。2/3の研究では理論が明示的に使われている。一般理論として、交換理論、役割理論、システム理論、構造/機能理論、象徴的相互作用理論、勢力/統制理論、葛藤理論、公平理論の8つに着目すると、一般理論の明示的な利用は1/4で行われているということになる。「意外と少ないな」というのが率直な感想である。

家族社会学の分野では、一般理論よりも家族現象を知ることに関心が払われているのだろうか。

社会学での新しい理論、推論の、たとえば、アブダクション(abduction、仮説形成、仮説生成、仮説的推論、最良の説明への推論)などの新しいタイプ、潜在変数を含む共分散構造分析などの理論(より控えめには、命題群)を内部に含み持つ分析方法など、それぞれの分野で新しいものが作られている。理論・検証・知識の関係を理解するためにも、理論構築を行うあるいは理論構築の方法を教授するに当たって、理論構築を科学哲学の視点から検討することは、今後、さらに重要になるだろう。

表1 Journal of Marriage and the Family、1990-1999で
報告された経験的な研究の明示的な理論の使用

理論	度数	%	理論	度数	%
言及された明示的な理論がない	265	39.3	文化理論	11	1.6
交換理論	52	8.2	社会資本論	10	1.4
ライフコース・パースペクティブ	38	5.0	世代間の理論	10	1.4
ジェンダー理論	31	4.6	人間の発達理論	9	1.3
役割理論	26	3.8	勢力/統制理論	9	1.3
システム理論	24	3.5	社会的な因果関係理論	8	1.1
エコロジー/人間生態学理論	22	3.2	認知的な発達理論	6	0.8
社会的な学習理論	22	3.2	対人関係の理論	6	0.8
ストレス/対処理論	22	3.2	同一性理論	5	0.6
構造/機能理論	22	3.2	親業の理論	5	.6
個人の名にちなんで名を付けられた理論	21	3.1	行動主義者理論	4	.5
社会化理論	16	2.3	葛藤理論	4	.5
象徴的相互作用理論	13	1.9	愛着理論	4	.5
リソース理論	12	1.7	公平理論	4	.5
家族発達理論	11	1.6	アイデンティティ理論	4	.5
フェミニスト理論	11	1.6			

参考文献

- Bengtson, Vern L., Acock, Alan C., Allen, Katherine R., Dilworth-Anderson, Peggye, and Klein, David M. (Eds.), 2005, Sourcebook of Family Theory & Research, Sage.
- Blalock, Hubert M., Jr., 1964, Causal Inferences in Nonexperimental Research. University of North Carolina Press, New York.
- Blalock, Hubert M., Jr., 1969, Theory Construction: From Verbal to Mathematical Formulations. Prentice-Hall, New Jersey.
- Blalock, Hubert M., Jr. Ed., 1971, Causal Models in the Social Sciences, Aldine, Chicago.
- Burr, Wesley R., 1973, Theory Construction and the Sociology of the Family, John Wiley & Sons, New York.
- Burr, Wesley R., et al. 1979, Contemporary Theories about the Family, Vol.1, 2. Free Press, New York.
- Chalmers, A. F., What is This Thing Called Science? An Assessment of the nature and status of science and its methods, Second Edition. (=1985、高田紀代志・佐野正博、『新版科学論の展開』恒星社厚生閣。)
- Collins, Randall, 1985, 1994, Four Sociological Traditions, Oxford University Press. (=1997、友枝敏雄、ランドル・コリンズが語る社会学の歴史、有斐閣。)
- Glaser, Barney G., and Strauss, Anselm L., 1967, The Discovery of Grounded Theory: Strategies for Qualitative Research, Aldine, New York. (=1996、後藤隆・大手春江・水野節夫、『データ対話型理論の発見』、新曜社。)
- Goode, W. G., 1961, "Family Disorganization", In Merton R. K. & Nisbet, R. A. (Eds.) Contemporary Social problems: an introduction to the sociology of deviant behavior and social disorganization. Harcourt, Brace &

- World.
- Goode, W. J., Elizabeth Hopkins, and Helen McClure, 1971, *Social Systems and Family Patterns: A Propositional Inventory*, Bobbs-Merrill, Indiana.
- Hage, Jerald, 1972, *Techniques and Problems of Theory Construction in Sociology*. John Wiley & Sons. (=1978小松陽一・野中郁次郎、『理論構築の方法』、白桃書房。)
- Homans, George C., 1950, *The Human Group*, Harcourt Brace Jovanovich, Inc. (1950=1959、馬場明男・早川浩一、『ヒューマン・グループ』、誠信書房。)
- 市川伸一、2004、「心理学理論の特徴とその生成・検証のプロセス」、21-37。森正義彦編、2004、『科学としての心理学 理論とは何か？ なぜ必要か？ どう構築するか？』培風館。
- 今田高俊、1971、「科学するとは何か」(今田高俊・友枝敏雄編、『社会学の基礎』有斐閣、1-32)。
- 伊勢田哲治、2003、『疑似科学と科学の哲学』、名古屋大学出版会。
- 磯部卓三、1968、「了解的方法と自然科学的方法」、作田啓一・日高六郎編、『社会学のすすめ』、筑摩書房。
- 加藤昭吉、1968、『PERTの知識』、日経文庫(108)。
- Kuhn, Thomas S., 1962, 1970, 1996, *The Structure of scientific revolutions*, The University of Chicago Press. (=1971、中山茂、『科学革命の構造』みすず書房。翻訳の底本は1962年の原著を改訂し、補章が追加されたもの。)
- Lakatos, Imre (edited by John Worrall and Gregory Currie), 1978, *The Methodology of Scientific Research Programmes*, Philosophical Paper Vol.1., Cambridge University Press. (=1986、村上陽一郎・井山弘幸・小林傳司・横山輝雄、『方法の擁護 科学的研究プログラムの方法論』新曜社。)
- Laudan, Larry, 1977, *Progress and Its Problems: Towards a Theory of Scientific Growth*, University of California Press. (=1986、村上陽一郎・井山弘幸、『科学は合理的に進歩する 脱パラダイム論へ向けて』サイエンス社。)
- Lave, Charles A. and March, James G., 1975, *An Introduction to Models in the Social Sciences*, Harper & Row. (=1991、佐藤嘉倫・大澤定順・都築一治、『レイブ&マーチ 社会科学のためのモデル入門』、ハーベスト社。)
- Merton, Robert K., 1957, *Social Theory and Social Structure: Toward the Codification of Theory and Research*, Free Press. (=1961、森東吾・森好夫・金沢実・中島竜太郎、『社会理論と社会構造』みすず書房。)
- 森正義彦編、2004、『科学としての心理学 理論とは何か？ なぜ必要か？ どう構築するか？』培風館。
- Mullins, Nicholas C., *The Art of Theory: Construction and Use*, Harper & Row, New York.
- 中道實、1997、『社会調査方法論』恒星社厚生閣。
- 内藤愨七、1995、『科学哲学入門 科学の方法・科学の目的』、世界思想社。
- 野々山久也、1999、「家族研究における理論展開」野々山久也・渡辺秀樹、『家族社会学入門』文化書房博文社。
- Reynolds, Paul D., 1971, *A Primer in Theory Construction*. Bobbs-Merrill, Indiana.
- Stinchcombe, Arthur L., 1968, *Constructing Social Theories*. Harcourt, Brace & World, New York
- 太郎丸博、2006、「Laudanの研究伝統論による社会学理論発展方法の考察」『社会学評論』57(1) 41-57。
- Taylor, Alan C. and Bagd, Aparna, 2005, *The Lack of Explicit Theory in Family Research - A Case Analysis of the Journal of Marriage and the Family 1990-1999*. In Bengtson, Vern L., Acock, Alan C., Allen, Katherine R., Dilworth-Anderson, Peggye, and Klein, David M., 2005, *Sourcebook of Family Theory & Research*, Sage.
- 戸田山和久、2005、『科学哲学の冒険 サイエンスの目的と方法をさぐる』、日本放送出版協会。

Wallace, Walter L., 1971, *The Logic of Science in Sociology*, Aldine, Chicago.

山根真理、2005、「家族を考える視角」、吉田あけみ・山根真理・杉井潤子編著、『ネットワークとしての家族』、ミネルヴァ書房。2-24。

吉田あけみ、2005、「ジェンダー・セクシャリティで読み解く家族」、吉田あけみ・山根真里・杉井潤子編著『ネットワークとしての家族』ミネルヴァ書房。

Zetterberg, Hans L., (1954,) 1963, 1965, 1966, *On Theory and Verification in Sociology*, 3rd Enlarged Ed. The Bedminster Press, New Jersey. (1966=1973, 安積仰也・金丸由雄、『社会学的思考法 - 社会学の理論と証明』、ミネルヴァ書房。)